

# 過ごした日々を 振り返って

～旅立ちのメッセージ～

母校への感謝を込めて

研究と教育への想いをつなぐ

- 04 人文学部地域文化課程  
原 里佳子  
教育人間科学部学校教育課程  
岸本 奈々
- 05 法学部法学科  
柳町 由貴  
経済学部経営学科  
内山 明音
- 06 理学部化学科  
高橋 直大  
医学部医学科  
文 智勇
- 07 医学部保健学科  
荻原 良太  
歯学部歯学科  
山田 瑛子
- 08 工学部機能材料工学科  
木村 彩子  
農学部応用生物科学科  
甲州 努
- 09 大学院教育学研究科  
山倉 裕子  
大学院保健学研究科(博士前期課程)  
帆苅 裕
- 10 大学院現代社会文化研究科(博士後期課程)  
上松 恵理子  
大学院自然科学研究科(博士前期課程)  
高山 和俊
- 11 大学院技術経営研究科  
横山 昇  
大学院医歯学総合研究科(修士課程)  
平林 友香

- 12 人文社会・教育科学系(経済学部)教授  
柳 喜重郎  
人文社会・教育科学系(教育学部)教授  
森田 龍義
- 13 自然科学系(理学部)教授  
周藤 賢治  
自然科学系(理学部)教授  
樫田 昭次
- 14 自然科学系(理学部)教授  
田澤 純一  
自然科学系(工学部)教授  
田中 真人
- 15 自然科学系(工学部)教授  
石橋 達弥
- 16 自然科学系(農学部)教授  
伊藤 忠雄  
自然科学系(農学部)教授  
福山 利範
- 17 自然科学系(大学院自然科学研究科)教授  
鈴木 宜之  
医歯学系(医学部)教授  
栢森 亮
- 18 医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授  
鈴木 宏  
医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授  
染矢 源治

message

# 過ごした日々を 振り返って

～旅立ちのメッセージ～

～母校への感謝を込めて～

■人文学部地域文化課程

HARA RIKAKO

## 大学生生活を終えて

原 里佳子

自分の大学生生活を振り返ってみると、とにかく「経験」の多い4年間でした。オーケストラ部に入ってバイオリンを始めたり、週5日アルバイトをしたり、海外旅行や短期の語学研修に行ったり、就職活動で苦戦したり、教育実習に参加したり、さまざまなことに挑戦したと思います。実際に自分の身をもって体験したことは、楽しかったことも辛かったことも、必ずその後の自分の糧になると、卒業を目前にして実感しています。たくさんの気の合う友人や尊敬できる先生方に出会うことができ、とても恵まれていました。また、最近卒業論文の作成を終えました。提出日前日には徹夜もしましたが、仲間とともに勉強に励んだ時間はとても楽しい思い出です。今年、社会人になりますが、これまで学んだことを総動員して頑張っていきたいと思います。



中国の内モンゴル自治区にて中国人の友人と。本人は左側。

■教育人間科学部学校教育課程

KISHIMOTO NANA

## 絆

岸本 奈々

もう大学を卒業すると思うと、この4年間は実にあっという間であつたということを実感する。しかし、その短い期間の中でも、やりたいことはやってきたし、教員になるという自分の夢も実現することができた。そのように充実した大学生活を送ることができたのは、もちろん私1人の力ではない。私の周りにいる様々な人たちの力があってこそ、この4年間を楽しく過ごすことができた。今強く感じている。新発田から通っていた私を献身的に支えてくれた家族。上の人への礼儀や周りを見て行動することの大切さ、努力が実ってみんなで喜び合うことの素晴らしさを教えてくれた部活のメンバー。お互いに刺激し合い、高め合い、同じ苦しみも楽しさも一緒に味わってきた英語科の仲間。すべての人に感謝したい。そして、新潟大学で出会えたという一期一会ならぬ「越後一会」の縁を大切に、常に感謝の気持ちを忘れず、これからも人とのつながりを強く持っていきたい。



2009年英語科研修旅行にて。本人は前列右から2人目。



■法学部法学科

YANAGIMACHI YUUKI

## 大学生活で得られたこと

柳町 由貴

私は4年間の大学生活で実に多くのことを学びました。これはもちろん大学で様々な勉強をすることができたという意味もありますが、学んだことは学業の面だけではありません。

私は4年間でアルバイトやボランティア活動など、様々な経験をしました。そしてそれを通じ、社会のしくみや人とのつきあい方など、社会に出る上で必要な多くのことを学びました。また、失敗した時や悩んだり落ち込んだりしている時に、自分を支え、励まし、時には助言をくれる存在のありがたさを改めて知ることができました。家族をはじめ、大学の友人、先輩・後輩、先生方、バイト仲間など、たくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいです。

振り返ってみればあっという間の4年間でしたが、多くのことを学び、充実した日々を過ごすことができました。これからは大学生活で得た知識や経験を生かし、社会人として力を発揮していきたいです。



ゼミの仲間と南教授と。本人は最前列左から3人目。

■理学部化学科

TAKAHASHI NAOHIRO

## 卒業

高橋 直大

颯爽と過ぎた4年間、振り返ると様々なことを思い出す。新たに始まる生活に胸を躍らせたあの頃。仲間と乗り越えてきたテスト、その後の長期休み。日々、研究に明け暮れるこの1年間。非常に意義のある4年間を過ごせたと思う。

大学では専門的な知識を教えられるが、学んだことはそれにとどまらない。その1つとして、研究に対する姿勢がある。3年次までの学習は既知のことを学ぶ、いわゆる「catch up」型の姿勢であったが、4年次になって研究を進めていくうちに、自分らしさで追求していく「top runner」型という姿勢を学んだ。

また人間関係において、各地から集まる学生、さらには他学部の学生と関わることで自分の価値観が広がった。これは多くの人との交流を持てる総合大学ならではのと思う。

この4年間の経験を糧として、社会に多くに貢献できるように努めていきたい。



化学科の面々。写真中央が本人。

■経済学部経営学科

UCHIYAMA AKANE

## 全ての出会いに感謝!

内山 明音

私は大学に入ってダンスチームMIMA(ミーマ)というサークルに出会いました。イベントに向けて練習したり、合宿をしたり、年度末のLIVEで1年間の集大成を披露したりと、この4年間はほぼMIMAの思い出と言っていほど濃いものとなっています。そこで出会った仲間たちは、共に笑い、涙を流し、そして絆を深め合いながら過ごしてきた、私にとってのかけがえのない宝物です。

また、私は税理士の資格を目指していて、大学の授業と並行して受験勉強に励んできました。そして、そのような資格を目指す学生が集まって共に勉強しようという目的で活動している会計研究会に所属し、互いに刺激し、励ましあいながら頑張ってきました。結果、私の目標であった税理士試験会計2科目の合格を果たすことができました。

私の大学生活は、周りの人に恵まれていて、本当に充実した4年間でした。この場を借りて、私を支えてくれたすべての人に感謝したいと思います。



新大祭でMIMAの仲間と一緒に。本人は最前列右から2人目。

■医学部医学科

MUN CHIYONG

## 卒業にあたって

文 智勇

縁も所縁もない新潟に来てはや6年が経とうとしています。入学当初、関東地方でしか生活したことのない私にとって、新潟の冷たい雨風は耐え難いものでした。しかし、ここで出会った人の温かさが、そんな寒さを吹き飛ばしてくれました。お世話になった先生、尊敬する先輩、愛すべき後輩、そして6年間をともに過ごした同級生。大学生活における全ての出会いが、私の宝となっています。

近年、医師不足、医療崩壊、医療費の増大など、医療界を取り巻く情勢は厳しくなっています。そのような中で、社会が医師に求めるものは知識・技術だけではなく、一人の人間として患者さんと真摯に向き合える力が必要とされています。新潟大学での教育は必要十分な知識を与えてくれましたし、ここでの出会いが医師となりうる人間力を育んでくれました。今や第二の故郷となった新潟に感謝しつつ、人の心がわかる医師になれるよう、これからも努力していきたいと思っています。



2009年東日本医科学学生総合体育大会優勝時。本人は最前列左から3人目。



■医学部保健学科

OGIWARA RYOUTA

## 卒業にあたって — 後輩への思い —

荻原 良太

4年という短さを感じ始めたのは3年生が終わろうとしていた時だった。

病院実習を数ヵ月後に控えた私は、自身の知識の危うさに愕然とした。授業を真面目に受け、定期試験に対し真摯に取り組んできた私だったが、実習に必要な知識を振り返ったとき、吸収したと感じたものが蓄積されていなかったからだ。私は後悔した。目先の困難に囚われ唯々諾々と時間に服していた自身に苛立ちを覚えた。目標を持ち、それに向かって努力することの大切さを感じたのはその時であった。

4年間は瞬く間に終わってしまう。その時間の中で目標を抱き達成出来れば、充実した大学生活であったと胸を張ることが出来るであろう。目標は何でも良い。TOEICの点数を伸ばすことでも、サークル活動を頑張ることでも、資格試験に挑戦することでも何でも良い。私は大学院に進学してからも努力するつもりである。後輩の皆さんにおいても、充実した大学生活を過ごされることを期待します。



卒業研究発表打ち上げ会場にて。本人は右端。

■工学部機能材料工学科

KIMURA AYAKO

## 卒業を迎えて

木村 彩子

入学してからの4年間はあっという間に過ぎていきましたが、学部や部活動でかけがえのない仲間に出会い、非常に充実した毎日を送ることができました。特に、ラクロス部での活動は、私の生活の大部分を占めていました。早朝から練習に励み、互いに励まし合ったり本音で語り合ったりと苦楽を共有し、心身ともに私を大きく成長させてくれました。同じ目標に向かって一丸となり努力する素晴らしさを実感できました。時につらい出来事もありましたが、良いことも悪いことも全て私の糧になったと思います。

卒業という節目を迎えますが、いつも温かく見守ってくれた家族、指導してくださった先生方、共に過ごしたたくさんの仲間への感謝の気持ちを忘れず、今後自分の夢や目標に向かって日々精進していきたいと思っています。



ラクロス部の仲間と一緒に。本人は右端。

■歯学部歯学科

YAMADA EIKO

## 卒業を前にして思うこと

山田 瑛子

今振り返ればあっという間の6年間。けれど、入学した頃は全く歯科の知識のない素人がわずかに臨床に関わったこと、そして6年間一緒に過ごした友人と別れる時期が近づいていること、こういうことを考えてみると、やはり6年間は長かったのかもしれない。

歯学科は1学年約40人とコンパクトな集団ですが、だからこそそれぞれの仲間と深く関わることが出来たと思います。症例に関して共に悩み、相談し、勉強したことは一人で教科書を前にしただけでは得られない経験でした。また、時間にとらわれず熱心に指導してくださった先生方や、臨床実習で関わった患者様からは非常に多くの事を学ばせて頂きました。

冬の連日鉛色の空が大嫌いで、新潟って嫌だな...と思った時期もありましたが、鉛色の空を見ればこそ思い出すことも沢山あります。6年間で出会った方々、支えてくれた家族、そして新潟の地に感謝しています。



臨床実習終了後の打ち上げにて。本人は左端。

■農学部応用生物科学科

KOSHU TSUTOMU

## 4年間の節目を迎えて

甲州 努

2006年の春、大学の門をくぐった。当時、大学には色々な期待をしていた。部活やサークル、バイトや講義、今までとはまったく異なる生活が待っていると。月並みではあるが、この大学に入ったことを本当に良かったと今なら言える。

振り返ってみると、あっという間だった。気づいたら4年生になっていて、卒業を迎えていた。この4年間はかなり濃密であった。自分にとって、とても強い影響を与えた4年間だったように思う。様々な人と接し、考え方が変わった。自発的に行動しなければ結果は変わらない、ということも学んだ。

私はこの春から、新潟大学大学院へと進学する。しかし、3月でひとまず節目を迎える。4年生として、学部生最後の年次として、この4年間で培った力のすべてを卒業論文へと注ぎたいと思う。そして、次へのステップへとつなげていきたいと思う。



卒業研究のための実験中。



■大学院教育学研究科

YAMAKURA YUKO

## 新潟大学を修了するにあたっての思い

山倉 裕子

大学院に進学してからの2年間はあっという間に過ぎ去り、気がつけば修了を目前に控えていました。大学院生活がまるで一瞬のように過ぎ去ったのは、毎日が充実していたからだと思います。この2年間は人生の中で一番熱心に学業に取り組んだ2年間だったと思います。このように学業に打ち込み、充実した日々を送ることができたのは、温かくも熱心にご指導くださった先生方や、一緒に多くの困難を乗り越えてきた友人のおかげです。私が大学院を修了できたことも、教師になるという夢を叶えられたことも、多くの方々の励ましと支えがあってこそ成し得たものです。この場を借りて、お世話になった方々に心から御礼申し上げます。

大学院進学を目指し始めた時から、教師になることは、私にとって大きな目標でした。しかし、今後はそれを出発点とし、大学院で得た知識と経験を糧に、これから出会う生徒たちと共に一歩一歩前へ進んでいきたいと思っています。



研究科の友人と一緒に。本人は左側。

■大学院現代社会文化研究科(博士後期課程)

UEMATSU ERIKO

## 修了にあたって

上松 恵理子

私は中学校で教員をしながら、時代のニーズに沿った研究に触れたいという思いから、大学院に社会人入学をした。大学院では海外での学会口頭発表やポスター発表を経験したことが一番の思い出である。また、国内においては学会発表を通じて究友が出来たことが財産となった。社会に出た後に再び学生生活を過ごしたことで、人生を2倍楽しんだ気持ちである。在学中には悲しい出来事もあった。中越大地震で両親が被災し、私の家に身を寄せ不自由な思いをさせた。また、大変温かく親身になって教授して頂いた、指導教員の齋藤勉先生の訃報が修了間際であった。とても辛く悲しいこともまた、良いこともあった2度目の学生生活であったが、研究と仕事の両立ができたことで、今は心底ホッとした気持ちである。今後は研究の成果を活かし、また、多くの経験を糧として教育に従事したいと考えている。



International Symposium & Conference, Educational Media in Schoolsにて。

■大学院保健学研究科(博士前期課程)

HOKARI HIROSHI

## 修了にあたって

帆 莉 裕

私は大学4年次に行った卒業研究で研究に興味を持ち、進学を決めました。ただ、研究には興味があったものの、2年のうちに成果を出し、修了できるのか不安がありました。

いざ大学院での生活が始まると、研究を進めるとともに、授業の課題にも追われる日々が続きました。授業では、非常に多くの英語の論文を読みました。日本語の論文を理解するだけでも大変なのに、英語の論文を訳して、読解するには非常に時間がかかりました。しかし、この課題のおかげで、論文の読み方や論理的思考の能力が養われたと思います。

一方で、研究活動も学部生の時とは異なり、基本的に自分で考えて進めなければならず、試行錯誤の日々が続きました。しかし、本当に行き詰ったときには、先生方の適切なアドバイスによりクリアすることができました。

大学院生活は本当に短く感じるものの、今までの人生で最も充実した2年だったと思います。



右手前から3人目が本人。

■大学院自然科学研究科(博士前期課程)

TAKAYAMA KAZUTOSHI

## 新潟大学を修了するにあたっての思い

高山 和俊

新潟大学に入学してから6年の月日が経とうとしています。人生の4分の1という非常に長い期間であったにもかかわらず、充実した生活を送っていたせいかとても短かった気がします。特に大学院での2年間は一瞬で過ぎていきました。

大学院に進学当初、私は研究に対して戸惑いを感じ、悩むことが多々ありました。「果たして大学院に入った意味はあったのか」と疑問に思うこともありましたが、今では「意味があった」と自信を持って言うことが出来ます。悩み考えることを多く経験し、自らの成長に繋がれたことや、大学院生ならではの経験が積めたからです。私の人生に大きなプラスとなりました。答えを出すには、家族や友人、研究室の人々などの支えが必須でした。この場を借りて感謝します。

さて、4月から私は新潟を離れ、社会人として新たな環境に身を置くこととなります。新潟大学出身者としての誇りを胸に、少しでも世の中での役に立てればと思います。



研究室の忘年会にて。本人は後列左から4人目。



■大学院技術経営研究科

YOKOYAMA NOBORU

## 新潟大MOTを修了するにあたって

横山 昇

社会人として10年が過ぎたとき、さらなる自分のレベルアップのため選んだ道がこの新潟大学MOTへの入学でした。

私は現在新潟県五泉市にある横山建設株式会社で勤務をしています。いま地方の中小企業が果たさなければならない役割はたくさんあります。企業の存続や発展はもとより、地域経済の活性化や町おこしなどさまざまです。2年という短い期間ではありましたが、その限られた時間の中での講義はもちろん、それぞれの専門分野の教授をはじめ、企業コンサルタントや大手企業在職の先生方、異業種の一線で活躍されている生徒達との意見交換や討論等、大変有意義な時間を過ごせたと思います。今後この2年間の成果である知識の畑を耕し立派な実務の実を収穫できるよう実践に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、会社のみなさんや家族には通学のため、私のわがままに理解と協力をしていただいたことを本当に感謝しています。



実務家教員のアドバイスに耳を傾ける演習発表前。本人は左側。右側は実務家教員。

■大学院医歯学総合研究科(修士課程)

HIRABAYASHI YUKA

## 新潟大学を卒業・修了するにあたっての思い

平林 友香

新潟で1人暮らしを始めてから、もう6年が過ぎようとしています。私にとってこの6年間はかけがえのないものであり、たくさんの思い出を作ることができましたし、少しは成長できたかなと感じています。

まず、歯科衛生士と社会福祉士の資格を取得することができて、大きな自信につながりました。そして歯科の分野で口腔ケアや摂食・嚥下リハビリテーションを学び、多くの患者さんと接することができました。この経験をこれから先、必ず活かしていきたいと思っています。

また、新潟ではたくさんの友人や先生方にお世話になりました。4年生のとき、皆で励ましあい勉強し、時には夜遅くまでおしゃべりをしたことが懐かしいです。大学院では歯科でも福祉でも尊敬できる人との出会いが多く、とても恵まれていました。

大好きな新潟大学を去るのはとても寂しいですが、学んできたことや感じたことを多くの人に伝えられるように頑張りたいと思います。



研究室の仲間と一緒に。本人は真ん中。



■人文社会・教育科学系(経済学部)教授

柳 喜重郎 YANAGI KIJURO

## 新潟大学を退任するにあたっての思い

昭和54年4月1日新潟大学商業短期大学部に着任以来、長い間お世話になりましたことを厚くお礼申し上げます。当時、1学年の学生数は80名、総教員は10名でした。校舎は現附属小中校舎のある所で、昭和24年新潟大学発足時以来の木造校舎でした。この木造校舎での記憶は不思議な鮮明さで甦ってきます。その一つが事務室前の小教室ほどの空間です。昨年、私達の校舎に自習室、打ち合せ場所、話し合いの場などの機能をもった数カ所の空間が新しく出来ました。学生が生き生きと活動する空間です。まさに当時、このような小空間を講義室への行き帰りに全員が通過していったのでした。皆が一人ひとりを支え合う空間でした。今この空間がかけがえのない場になることを期待しています。

商業短期大学部の仕事を前半とするなら、後半は平成6年か



昼間ゼミのみなさん。



夜間主ゼミのみなさん。

ら経済学部の仕事となります。夜間教育の流れは4年制の夜間主コースへと引き継がれました。今、思い返して、その伝統に何を付け加えたのでしょうか。先輩諸先生の熱意や事務の方々の助け、そして、熱心に勉強に励む学生のそのキラキラ輝く目をバネにやってきたと思います。

私の専門は会計学です。今年度、全学同窓会のなかに税理士や公認会計士の資格者からなる「六華会計人会」が結成されました。短大、学部そして大学院で勉強した学生たちのネットワークがさらに強い絆で結ばれました。新潟大学のますますの発展を祈念します。



■人文社会・教育科学系(教育学部)教授

森田 龍義 MORITA TATSUYOSHI

## 教師を生み出す教育学部にこそ、学問の火を!

33歳で採用され、人生の半分を教育学部で送ったことになりました。教育学部には同僚性にあふれた教員集団があり、熱意のある学生諸君に恵まれ、過酷な競争とは無縁の「タンポポ属の種分化の研究」というテーマに一貫して取り組むことができました。家族と共に行かせていただいたオランダでの在外研究が大きな転機となり、「シロバナタンポポ、ウスギタンポポの起源」の解明という成果を挙げることができました。学生諸君を指導した卒業研究では、自然に囲まれている新潟大学の地の利も生かし、30種以上の野生植物の生活史の研究に取り組みました。ヒストリーとは「物語る」という意味なのだそうですが、生活史はまさにその植物のおもしろさを物語ることでなければならないといつも言って来ました。私は「教師には教えるべき内容を創り出す



生物科学生控室での談笑。

力量が必要なのだ」という言葉が好きです。教師は伝える人であるだけでなく、その内容についても豊かなものを創り出すことができなければ、力のある教育はできないと思います。学生諸君には、「教えるための技術や方法」を学ぶことはもちろんのこと、研究能力を含む「教科の力」を育ててほしいと願っています。学問の火を燃やし続けて下さい。





■自然科学系(理学部)教授

周藤 賢治 SHUTO KENJI

## 新潟大学を 退任するにあたって

昭和56年2月に本学に着任して以来、早くも29年が経ち、無事定年退職を迎えました。これまでご支援くださいました多くの教職員の方々に感謝申し上げます。29年前に内野駅に降り立ち、徒歩で理学部へ向かった途中にはほとんど人家がなかったと記憶しています。現在の本学周辺の発展からみれば隔世の感があります。大学も大きく変化しました。着任当時はどんなに熱心な学生でも理学部では修士課程止まりでした。博士課程ができるとともに研究もおおいに深化しました。私は本学の右肩上がりの発展過程の道のりとともに歩むことができたことを至福のことと感じています。私は本学着任時に、これからなすべき島弧火山岩研究の本の苗を植え、それを枯れることなく頑丈なものに育てることを目標としてきました。その目標の達成のため



「29年の記録」用の露頭写真撮影の一環として燧ヶ岳火山に登ったときのもの。(平成21年9月27日撮影)

に、この29年間、多くの学生や院生とともに、東北日本、北海道、新潟周辺、北陸、瀬戸内などの諸地域の火山岩の調査・研究を行ってきました。これからも研究は進歩の道をたどることでしょう。研究に従事するとは、その研究者が生きた時代の研究レベルの向上に寄与することだと思います。新潟大学の研究者の方々のご健闘を期待するとともに、本学の一層の発展を願っています。

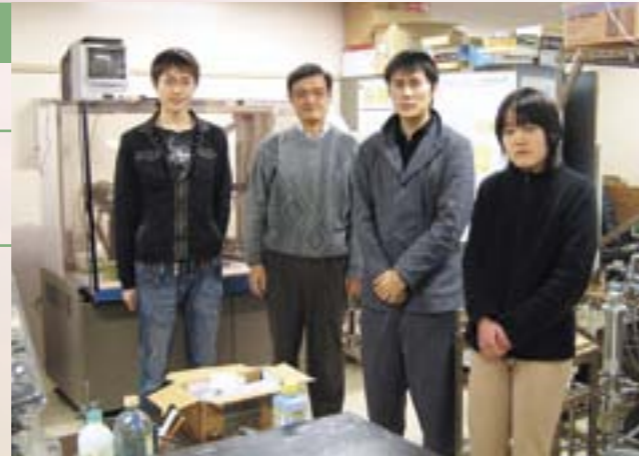


■自然科学系(理学部)教授

檜田 昭次 KASHIDA SHOJI

## 大学を去るにあたって

私は1972年の春まだ浅いころ理学部にまいりました。物理学科に22年、自然環境科学科に16年の合計38年間の長きに渡ってお世話になり、ありがとうございました。専門は材料科学という分野で主にX線を使って物質の構造を調べる仕事を行ってきました。着任当時の五十嵐キャンパスはまだ教養部と理学部が移転しただけで、他に図書館、本部と第一生協食堂があるだけでした。当時のキャンパスは松林と砂地が多くて、植えた木も育ちにくく、五十嵐砂漠と言われていましたが、今ではポプラや楓のような木が見上げるように立派になっています。またその後、整備された建物と相まって、緑の多い良好な環境になりました。このキャンパスは砂質のため根が伸びやすく、地下水がある高さにまで根が達したら十分に水を吸い上げることが出



課題研究の皆さんと。

来、大木が生長するのに適していると言えます。仕事などでも同様で一見不毛と考えられている分野でも、その源泉に達することが出来れば多くの成果が期待できると思われれます。これからの若い皆さんが、充実した環境のもとで新しい芽を見つけて、羽ばたいて行かれることを願っております。



■自然科学系(理学部)教授

田澤 純一 TAZAWA JUN-ICHI

## 24年間務めた新潟大学を去るにあたって

私は、昭和61年4月に教養部の助教授として母校の新潟大学に赴任しました。それまで勤めていた“研究第一主義”をモットーとする大学とはまったく異なる“教育最優先”のところで、しばらくはボンヤリしておりました。さまざまな分野の教員が集まる教授会や忘年会などが懐かし思い出されます。平成6年4月に理学部へ配置換えとなりました。専門科目を担当し、卒論指導ができることに期待して地質科学科に移りましたが、最初はなかなかスムーズにはいきませんでした。しかし、研究面では比較的順調に仕事をすすめることができました。平成16年4月に本

学も“法人化”され、教育、研究、管理運営のあらゆる面で忙しくなり、落ち着いて仕事ができなくなりました。また、教室の雰囲気も殺伐としてきたような気がします。私の専門である“古生代腕足類の分類”に基づく研究などは、役立たない学問とみなされ、巨大プロジェクトの陰で、消滅しそうです。理学、自然科学は基礎が大切であり、多くの研究分野が裾野に広がった状態こそ構造的に強いのであって、このままでは早晩全体として衰退することが危惧されます。若い人達を中心になって、わが国の科学教育・研究をたてなおすことを願望します。



■自然科学系(工学部)教授

田中 真人 TANAKA MASATO

## 新潟大学を 退任するにあたって

平成22年3月31日付けで停年を迎えるにあたり、工学部が長岡から新潟へ統合移転してきたからの大学の移り変わりを綴ってみたい。

移転してきた昭和54年当時、大学周辺には飲食店が一軒と民家やアパートが点在しており、大半がキジや野うさぎが見られる畑や松林であったと記憶している。

新潟では、長岡時代に経験したような大雪や大学紛争もなく、春には見事な桜を堪能しながら新学期の準備に取り掛かったものでした。

その後、全国の大学における工学部の拡充改組において、大講座制となり名前からは良く理解できないような学科が誕生してその運営においても、また新学科創設においても多くの時間を費やしました。それから大学院博士後期課程が設立され、理工農を中心とした研究体制に生じたネジレ現象の解決に向けて何回かの改組があり教育研究体制が著しく充実した感があります。そ



研究室での卓球大会。

の後の国立大学の法人化により、大学教員の勤務精神も、研究中心から教育・研究・社会貢献へと大きく変化したと思います。大学では、先ず研究において良い成果を挙げ、これを教育と社会貢献に生かすことが肝要と思いますが、このバランスをうまく調節するために、大学教員にはこれまでにないロードの負担が課せられると思います。国家の財政的危機や地球温暖化防止に端を発する経済的な抑制、18歳人口の激減など大学を取り巻く非常事態はこれから益々現実味を帯びてくることは確実ですが、新潟大学が英知を絞りこれらを克服して発展されますことを、毎年訪れる春とキャンパスの桜を楽しみながら祈念いたします。





■自然科学系(工学部)教授

石橋 達弥 ISHIBASHI TATSUYA

## 新潟大学を 退任するにあたっての思い

昭和42(1967)年3月21日本学(工学部機械工学科)を卒業し、奈良市の航空自衛隊幹部候補生学校に第7期技術幹部候補生として入校した。10月に幹部候補生学校を卒業後、見習幹部として岐阜県各務原市の実験航空隊付きになった。しかし卒業研究指導教官の古川徹教授(金属材料)のお誘いを受けて、昭和43(1968)年3月2日付で本学助手(工学部機械工学科・機械要素・機械力学講座)となり、その後42年と1ヶ月勤務させていただくことになった。航空自衛隊ではジェット戦闘機の開発・改良・設計が主任務であったが、大学では下田茂教授(自動車工学・機械設計)と高野英資助教授(機械力学・振動工学)の下で教育と研究の指導を受けた。昭和55(1980)年に工学部が新潟市に移転して以来、平成22(2010・昭和85)年までの満30年間、長岡市から新潟市への通勤も兼ねて100万kmの走行実験を行った。その間、機械工学科→機械システム工学科→機能材料工学科(材料評価学)と所属学科も変わり、担当科目も機械製図・機械設計・機構学・自動車(車両)工学・材料評価学・機能材料組織学・機能材料力学・プログラミング通論…と20数科目を越し



最後の研究室研修旅行(富山城をガラスに映して)2009年11月6～8日

た。また最も身近に在る最先端の工業製品である自動車の魅力を伝えると共に、学生の交通事故減少を目的として全学部向けにボランティアで開講し一人を担当した科目「自動車」では、8年間で2,742名の受講者に単位を認定することができた。

1年間の自衛隊経験は、その後の42年間に及ぶ大学教員としての活動に強い影響を与えており、そのため「大学教員としては精神的にアウトローであり続けた!!」との感が私には深い。しかし、「このアウトローの思い」が「機械・設計・材料・硬さ・自動車」という多面的な42年間に及ぶ教育研究生活を送る原動力となり、「学生および大学に対しては役に立てたのかな!？」と、退任するに当たり満足している。



■自然科学系(農学部)教授

伊藤 忠雄 ITOH TADAO

## 退任にあたって

卒業以来、母校に置かせていただいたせいか、退職は何やらようやく卒業できるという安堵の気持ちでいっぱいです。

振り返ってみますと、本学は全国有数の穀倉地帯と広大な中山間地域というフィールドに恵まれ、調査研究や教育、交流活動などに伸び伸びと取り組むことができ幸せでした。終盤は大学法人の制度設計や運営に関わることとなり、思うように農村回りはできませんでしたが、聖域なく吹き荒れる改革・変革という時代の嵐を実感してきました。「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残れるのは変化できる者である。」(ダーウイン)といわれますが、変わり身の不器用さに苦悶してきました。しかし、近年は大学も随分と変革が進んできたことを実感します。各種の教育改革や新鮮な



農村交流で地域づくりに一役買った学生諸君と。

空気を外から採り入れる社会連携などはその典型例でしょうし、職員の意識変革も随所に感じます。そうした道のりが新しい大学づくりに続くことを確信しています。

大学問題の向後に一抹の不安も交差しますが、新潟大学を愛する皆様の情熱に期待しています。長い間有り難うございました。



■自然科学系(農学部)教授

福山 利範 FUKUYAMA TOSHINORI

## 新潟大学を去るにあたって

倉敷から900kmのドライブで農学部に着任したのは昭和61年5月、市内の複雑な交通規制に戸惑ったことを24年後の今でも覚えている。豪雪を覚悟してきたにも関わらず新潟市の意外な少雪に驚かされたが、それにもまして完全講座制の前任地に比べ、学科・講座の枠はあるものの教員個人の自由度の高さに感激した。倉敷から持参した世界各地の大麦や農水省北陸農業試験場(現・独)北陸研究センター)からいただいた水稻品種を使って、耐病性や維管束についてある程度の結果が得られたのも自由に時間を使えたお陰かと思う。

本学勤務の後半は、平成13年の農学部改組に伴って新設されたフィールドセンター企画交流部に異動し、地域への窓口として情報発信・収集作業を行った。巨大な自然災害に襲わ



中山間地森光の恋人たち。

れ、その調査や支援ボランティアで被災地を訪れたが、地域での大学の存在意義について考えさせられた。また、学内で得られた知識(専門分野)が、フィールドでは、いかにひ弱かと思われ知らされた。総合大学の長所を活用できなかったことが悔しい。ただ、お付き合いしてきた中山間地集落が「むらづくり」で大臣賞を獲得したことは望外の喜びであった。

24年をなんとか過ごせたのは、大学教職員の皆様のご支援の賜物であり、深謝する。本学の今後の発展を祈念するとともに、いざ鎌倉の時に地域から暖かい支援を受けられる大学に成長されんことを望む。





■自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

鈴木 宜之 SUZUKI YASUYUKI

## 教育研究を振り返って

博士の学位取得後直ちに新潟大学理学部に就職して以来38年経過する。この間の様々の出来事を思い出すのは容易ではないが、3期に分けて振り返ってみたい。

最初の約15年間は、新潟大学には修士課程までしかなかったこともあり、「職業としての学問」に携わる研究者としての修業時代であったと思う。就職後3年して発表したクラスター物理研究が原子核理論の世界的リーダーに高く評価されて研究者としての自信を得たこと、アメリカ留学と国際会議で海外の研究者の面識を得たこと、「追いついて追いつく」方式で独自の研究を切り開くことの重要性を学んだことなど、この時期の経験は私にとって後の教育研究を進める上での財産となった。

1990年以後の10数年間は、博士課程の学生らと共に逸早く

不安定核物理の研究を中心に展開し、新潟大学がその研究拠点と認知されることいささか貢献できたのではないかと

思っている。また海外の仲間から紹介された若手研究者らと国際的に高く評価されている研究を推進できたことや、ハンガリー及びエジプトの大学との国際交流のお手伝いできたことも感慨深い。

最後の7年程は老いに対する戦いであったと思う。大学教員は常に同年代の学生を相手にするため世代間ギャップは拡大の一途をたどり、学生にインパクトのある課題を提供するためには自身が新たな課題に持続的に挑戦し、井の中の蛙にならないようにしなければならぬからである。どれだけできたかは今後の判断を待ちたい。

長年お世話になった教職員の皆様や出会った学生諸君に感謝し、新潟大学の更なる発展を願いつつ退職の挨拶とさせていただきます。



2009年12月でデブレツェン出張時、ブタペストにて。



■医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授

鈴木 宏 SUZUKI HIROSHI

## 新潟大学を退任するに当たっての思い

学生時代はクラブ活動、旅行などに熱中し、試験に滑らないように心がけていた。即ち、低空飛行で過ごし満足していた。しかし、卒業後に自分に常に課してきたことは、creativeであれということかもしれない。

研究は勿論新しい発見であるが、この純粋な学問以外にも同様のことがある。WHOに出勤した最初に君は何をしたいかを問われ、大学の気分そのままにcreativeな事をしたいと回答し、怪訝な顔をされた。最終的には、ジュネーブの本部からの仕事をやっていけばいいのではなく、我々の部署は彼らに対抗する新たな戦術・戦略により良い結果を得、痛快であった。

大学に赴任後も、国際保健としての仕事をアフリカで10年以上行ってきた。今度はWHOに対抗し、プライマリ・ヘルス・ケアの



医学部公衆衛生学教室開講六十年記念祝賀会。

新たな事業形態として、乳児健診を核とするGMP+を立ち上げ、現在成果を多くの国に紹介している。

大学教育とは既存の路線で進むのかと思ひ、興味が殆ど無かったが、GPやCOEだと騒がれ、新たな路線の模索が始まった。国内連携から国際連携と形態も推移して、何らかの新たな提案をしている。混乱の時代なのか?

Creativeといったが、自己満足かもしれない。それもいいのでは。楽しく仕事をするのがより大切である。破壊、批判でなく生産的な方向は希望がある。



■医歯学系(医学部)教授

栢森 亮 KAYAMORI RYO

## 新潟大学を去るにあたって

昭和43年に新潟大学医学部附属病院に就職し、放射線科教授の指導のもとに放射性同位元素(ラジオアイソトープ:RI)を用いて疾病の診断と治療を行う「核医学診療」を開始し、合わせて密封小線源や放射線業務従事者の被曝線量の管理などに従事してきました。その後、医療技術短期大学部、医学部保健学科にお世話になりました。42年間には数多くの思い出がありますが、中でも学生教育を主体にした「非密封RI使用施設」の設置に携わってきたことが特に心に残っております。この施設には40名の学生が化学系の実験を同時に行える実験室があり、放射化学実験、放射線管理学実験、放射性核種のエネルギーに対応した計測法の習得、更に施設内に保有する核医学画像診断装置(2検出器型 SPECT)によって機器の性



核医学画像診断装置(SPECT)の性能評価実習。

能評価法の実習が実施されています。教育実習の他にも放射線取扱主任者の取得に向けたRI安全取扱の教育・訓練や社会人の医療技術者を対象にしたRI取扱を含む講習会等にも利用されています。この施設の設置で、学生たちが恵まれた環境で実習ができることは教職員のご理解とご協力のお陰であると感謝しています。

最後に新潟大学の益々の発展をお祈り申し上げます。



■医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授

染矢 源治 SOMEYA GENJI

## 痛くなく、安全で、快適な歯科治療を求めて

新潟大学歯学部へ赴任して以来34年間、「短気で、ワガママ」を自他共に認める小生は、多くの人に支えられて、小さな一家の親父として極めて充実した時を刻むことができました。

歯科治療や抜歯は、今でも患者さんには痛い、恐ろしい、不安、不快なものと思われています。歯学部6年生の病院実習で、痛く辛い病气から解放するはずの歯科治療自体に苦痛が伴うことに疑問を持ち歯科麻酔学の道に進みました。赴任時のプレハブ研究室で一人からスタートして、「歯科治療恐怖症」の患者さんやショックを起こす患者さんに各種の薬剤や心身医学などを応用しつつ学んだ多くの技術と知識は近年格段に進歩しました。そして、これらを後の者に着実に受け渡すことができ、人も(建)物も見事に大きく育ちました。



歯学部女子部バレー部の皆さんと共に。

患者さんに笑顔が戻ることで得られる幸せは、ささやかですが、いつの時代でも変わらない医療の真髄です。ともすれば患者さんの心に無関心になりがちな一般歯科医では得られない医療人としてのしみじみとした幸福感、喜びを患者さんからこれまで沢山頂くことができたことを感謝し、歯科麻酔は素晴らしい仕事であり、また歯科麻酔医であることを誇りに思っています。これも新潟大学で、恩師や先輩は勿論、同僚、後輩を含め、尊敬できる多くの素晴らしい人々との邂逅のお陰です。

これらのことを大切にしつつ、残りの人生の新たな旅に出たい。